

医療ルネサンス No.7516

関節リウマチとお金 ③

安い「類似薬」普及進まず

暮らし 家庭

「安くなる薬が発売されました。使ってみますか」

富山市のB子さん(68)は2018年春、かかりつけの松野リウマチ整形外科院長の松野博明さんに提案された。

Bさんは、病気を引き起こす物質の働きを抑える生物学的製剤(生物製剤)を10年以上、週1回注射している。激しい関節の痛みはなくなるが、毎月の自己負担は3割負担で3万円以上、検査代なども合わせると4万円を超えることもある。70歳になると時給1200円で働く衣料品店の雇用契約は終わる。年金だけに頼る生活になると薬代を払えるか心配だった。時だけに、提案は朗報だった。

新たな薬は、「バイオシミラー」

(生物学的製剤類似薬)だった。生物製剤の後続品のため開発費

があまりかからないことから、薬価は5〜7割程度になる。ジェネリック医薬品(後発医薬品)の生物製剤版のイメーシだ。

松野さんから「悪化したら元の薬に戻そう」と言われていたが、以前と変わらず炎症を抑えられていた。月の注射代は1万円以上安くなり、Bさんは「年金生活になってもなんとか払っていけそう」と喜ぶ。

しかし、バイオシミラーは普及していない。

国のデータ(16年度)によると、ある生物製剤では、バイオシミラーの使用割合は3%だった。

その背景に「医師側に品質への

不安があるのでは」と松野さんは指摘する。実際、国の研究班の調査(17年)によると、「医師から勧められたら使いたい」と考える患者やその家族は7割に上る一方、「勧められた」患者は3割未満だった。

厚生労働省は「先行する生物製剤と同等の安全性と有効性がある」とするが、全く同じ成分ではないことなどから、品質を心配する医師も少なくない。

松野さんも当初その一人だった。だが、複数のバイオシミラーの開発に研究段階から携わり、「品質は確かだ」と確信したという。

国内で普及を図るには、安定供給も課題だ。あるバイオシミラーが想定以上に使用されたことで供給不足になり、処方する医師からの信用を失ったことがあった。

欧州では、国策でバイオシミラーへの切り替えが積極的に行われ、シェアが急拡大している。

松野さんは「日本でも、有効性と安全性のデータを積み重ねつつ、国がバイオシミラーの普及をより強力に進めてほしい。それが、経済的な理由で生物製剤の治療ができなかった患者さんの利益につながるはずだ」と話している。



松野さんが見守る中、看護師にバイオシミラーを注射してもらうB子さん(左、富山市で)



※過去記事は「ミミ」ドクターで